

京都工芸研究会 設立記念誌

京都の工芸



京都工芸研究会 設立記念誌

京都の工芸

京都工芸研究会設立によせて……………	3
京都工芸研究会 委員長 大塚正洋……………	
挨拶……………	4
京都工芸研究会 副委員長 小川正彦……………	
京都工芸研究会 副委員長 松田聖……………	
研究会活動の思い出とこれから……………	4
シナジーが創発する『技芸の湧源』機能に期待する……………	5
(地独) 京都市産業技術研究所 理事長 西本清一……………	
祝辞……………	5
京都ものづくり協力会 会長 渡邊隆夫……………	
◇旧三研究会概要……………	6
京都工芸研究会……………	
京都金属工芸研究会……………	
京都竹工芸研究会……………	
◇写真で見るこれまでの研究会活動……………	8
京の工芸展・京の伝統工芸展……………	8
京都金工展 京都竹工芸展……………	10
竹と金属デザインコンペ……………	10
第五〇回記念京都金工展……………	11
竹工芸公募展 in 京都……………	11
こんちく衆……………	12

京都工芸研究会設立によせて

京都工芸研究会 委員長 大塚正洋

平成二七年三月、京都の伝統産業に属する三つの研究会、京都工芸研究会、京都金属工芸研究会、京都竹工芸研究会を統合し、「京都工芸研究会」を設立いたしました。そしてこの十一月には新たな研究会の発足を記念し、京都工芸研究会設立記念「京都の工芸・逸品」展を開催いたしました。これまでの研究会活動を支えてこられたすべての会員の皆様、そして歴代役員の皆様、ならびに京都市産業技術研究所の方々に心からの敬意とお礼を申し上げます。初代の委員長を拝命いたす事となり、一言ご挨拶を申し上げます。

本研究会の母体であった旧京都工芸研究会、旧京都金属工芸研究会、そして旧京都竹工芸研究会の三研究会は、それぞれの創立以降、京都市産業技術研究所と連携を取りながら、京都の工芸のこころと技術を引き継ぐ様々な活動を展開してきた歴史がございます。

旧工芸研究会は、昭和二三年に設立され、京都市産業技術研究所の元で発足した研究会としては非常に歴史が古く、所属会員の方々の職種が一四分野にわたり京都の主な工芸分野が含まれており、その成り立ちの段階から「異業種交流」を実践した研究団体でありました。これまでに「京の伝統工芸展」と銘打って、他地方で展示会を開催、「京もの」の存在感をアピールされ、さまざまなテーマによる製品開発研究やウェブサイト構築への早期の取組など、異業種交流を強みとする活動を積極的に行ってこられました。

旧金属工芸研究会は、昭和三四年に設立され、会員相互の技術交流を図るため展覧会の開催や技術研究例会等を開き、金属工芸の振興のため活動されました。金属工芸の技術は鋳金、鍛金、彫金、象嵌、七宝、鋳と多彩であります。京都金工展」という展示会開催によって、一般市民への成果披露と金属工芸の技術錬磨につとめられました。平成二五年度には「第五〇回記念展」を廬山寺にて開催されました。

旧竹工芸研究会は、昭和三四年に設立されました。初期から五一回継続された「京都竹工展」の後には、平成二三年度から「竹工芸公募展 in 京都」を

総合テーマは「遊」〜三事業……………	13
製品開発研究……………	13
会報発行・インターネット……………	14
刊行物など……………	14
製品開発研究事業……………	15
講習会・勉強会・見学会など……………	16
伝統産業技術後継者育成研修の後援……………	16
◇新生・京都工芸研究会 これからの活動……………	17
京都工芸研究会 設立総会・祝賀会……………	17
「京都工芸研究会便り」……………	17
設立記念「京都の工芸・逸品」展……………	18
新商品開発事業「オトナの京もの」……………	19
竹編組勉強会……………	19
◇京都工芸研究会 略年表……………	20
◇京都市産業技術研究所のこれまで……………	21
略年表……………	
歴代担当職員からのメッセージ……………	
事務局一同より……………	
◇京都工芸研究会会員名簿……………	22
◇京都工芸研究会規約……………	24

平成二六年度まで開催されました。全国から作品を募集することによって、新しい竹の可能性を京都で見つけようとする積極的な取組でありました。また、「編組勉強会」を定期的で開催し、会員の編組技術の研鑽に励む一方、研究所主催のオープンセミナーでは、子供たちや一般の市民の方々に竹に親しんでいただくイベントにも取り組んでまいりました。

新生・京都工芸研究会は、現在八九会員となり研究団体の規模も大きなものとなります。この統合を契機に、京都市産業技術研究所と連携しつつ、よりいっそう研究会として活発に活動し、その質を高めていく必要があると思います。そのためにも研究会の会員一人一人が積極的に研究会活動に参加されることをお願い申し上げます。本研究会の特色である異業種交流によるメリットをいかなく発揮する活動や事業展開等についてご提案もいただきたいと思います。京都の伝統産業を取り巻く情勢は非常に厳しいものがありますが、平成二五年に「和食」がユネスコ無形文化遺産に登録されたことをきっかけに、日本の生活文化や食文化が注目され、伝統的な工芸品が注目を浴びているように思います。その中でも京都の工芸は、素材の良さ、洗練された意匠、細部にまでこころを配る手仕事を主とする技術が特徴であります。その素晴らしさを日本国内はもちろん、諸外国の方々にも肌で感じていただくために、あらゆる場面で、京都の工芸が活用されるための取組が必要です。本研究会でも商品開発事業等を行っておりますが、研究会として京都の工芸を発信していく活動に取り組みたいと思います。

これまで支援いただいている京都市産業技術研究所は、平成二六年に地方独立行政法人化されました。本研究会会員が有する伝統的な工芸技術を発展させ、次世代の工芸へと飛躍するため、最新の技術と素材そして製品開発方法の研究、若手技術者の育成事業等、各種事業実施において、京都ものづくり協力会とも連絡しあいながら、これまで以上に連携を深めていきたいと考えております。全ての会員の皆様とともに京都工芸研究会の門出を慶び、また今後の研究会活動がますます発展していくことを祈念いたしております。

京都工芸研究会 副委員長 小川正彦

新しく『京都工芸研究会』の設立にあたり、一言ご挨拶をさせていただきます。

平成二六年六月二十七日に旧京都工芸研究会の総会が開催され、約十一年間務められました片岡行雄委員長から小生がバトンタッチさせて頂き、委員長を拝命致しました。在任中は特別な活動が出来ず、申し訳なく思っております。

過去歴任の役員の方々のご苦勞を初め諸先輩のお蔭をもちまして、種々功績を残して、今日に至りました。又日々の業務に関しましては、京都市産業技術研究所の皆様方に大変お世話になりました。

旧京都工芸研究会は昭和二十三年に、旧京都金属工芸研究会は昭和三四年に、旧京都竹工芸研究会は昭和三四年に設立されました。

その後三研究会の関係者が集い連携を図る事を目的に、昨年平成二六年七月三十一日に第一回の統合検討委員会が開催されました。関係者の方々の意見を総合し、平成二七年三月二三日に設立総会が持たれ、この三研究会が統合され、新しく『京都工芸研究会』が生まれました。

今後は新しい『京都工芸研究会』として皆様方のご協力を得て、会の益々の発展と、皆様方のご健勝とご多幸を祈願して、挨拶とさせていただきます。

京都工芸研究会 副委員長 松田聖

旧京都金属工芸研究会の昭和三四年の発足、私の年齢と同年代の約五六年間の伝統ある研究会、ご縁があったのか：最後の委員長となり、昨年の一年間は、3Dプリンターの勉強会の開催をメインとして取り組んで参りました。

少しでも何か：皆さんにお役に立つ事があればと思いつつ、なんとか役を終える事となりました。

金属工芸研究会活動の中では、会員相互の切磋琢磨しながらの研修会等により、技術を高め、意見交換、仕事に対する姿勢を学ばせて頂きました。また、親睦会等での屈託のない会話の中から生まれる、会員間のコラボレーションにより、新たなモノづくりや新製品開発が生まれ、販売に繋がることもありました。アットホームな研究会活動にご協力くださいました皆様方には感謝しております。

本当に有難うございました。

今年度より三研究会が統合し「京都工芸研究会」が新たに設立いたしました。会員皆様方との新たな出会いを大切に「モノづくり」に取り組んで行けるように、そして研究会活動を円滑に進めていけるように大塚委員長のもと、副委員長としてサポート出来ればと考えております。

研究会活動の中で生まれる何か：を期待し、楽しみにして会員皆様と研究会活動を取り組んでいければと考えております。

研究会の中では、まだまだ若輩者ではございますが、今後とも宜しく願い申し上げます。

シナジーが創発する『技芸の湧源』機能に期待する

(地独) 京都市産業技術研究所 理事長 西本清一

京都が誇る多様な伝統工芸のうち、これまで独自のコミュニティを形成しつつ活動してこられた旧京都工芸研究会、旧京都金属工芸研究会、旧京都竹工芸研究会は、この度ひとつの組織に統合し、新たに「京都工芸研究会」を設立されました。同研究会活動を支援する事務局担当の地方独立行政法人京都市産業技術研究所を代表して、心よりお祝い申し上げます。

「京都工芸研究会」は二二の専門領域と総勢八九会員（普通会员八四社・賛助会員二団体・特別会員三名）を擁しており、工芸の多様性（ダイバーシティ）を特長とした『創発の場』が新たに形成されました。

学芸と同様に、工芸も長い年月を経て細分化し、多くの独立した専門分野・領域が並び立つ状況へ向かっています。その当初は、同質から異質へ分化する活力が漲り、独創的な新技術や新趣向、そして新作品が次々と生まれますが、やがて専門ごとに固有の技術が磨き抜かれ、それぞれ成熟期を迎えるに至ります。このような成熟期にあつては、異分野の強い相互作用による融合を通じて、新たな地平へ飛躍し得ることは歴史の教えるところなのです。

このたびの「京都工芸研究会」設立を契機に、異なる工芸分野で高度な専門性と成熟技術を蓄積してこられた会員各位が日常活動の中で『創発の場』を共有する意義は絶大です。「京都工芸研究会」が異分野融合のシナジー（相乗）効果を生み出す坩堝となり、新しい技芸の創発に導く、謂わば『技芸の湧源』機能を発揮されることを大いに期待しています。

祝辞

京都ものづくり協力会 会長 渡邊隆夫

京都工芸研究会が、去る三月二三日に、旧京都工芸、旧京都金属工芸、旧京都竹工芸の三研究会が統合されましたことお慶び申し上げます。

この間の大塚正洋現委員長を始めとする、役員各位のご努力と厚い志に敬意を表します。

十一月には設立記念展覧会「京都の工芸・逸品」展を催され、また設立記念誌「京都の工芸」を発刊された事を心よりお慶び申し上げます。

日本の工芸を代表される京都の工芸が、ここに統合され、その力を存分に発揮されることを期待しております。

小生も全国組織である公益財団法人伝統的工芸品産業振興協会の会長として、平成十年より十三年にわたり務めました。

ただ残念なことに「モノを大切に愛しみながら、未永く使う」、この日本の生活習慣が、利便性という概念のもと、まさに全国的に崩れつつあります。

工芸を用いて生活を彩り楽しむ、この当たり前とされていたことが、今まさに無くなるかも知れない危険状態です。

日本がアメリカとの戦争に敗れた後の昭和二十七年か二十八年、同志社中學生であった小生は礼拝に毎日出ていました。その時覚えている説教は二つしかなく、その一つはミス・グイン先生という高齢のアメリカ老婦人の説教でした。

「もったいない。このすばらしい言葉は日本語そのものです。英語には、無駄とかの言葉はありませんが、モノを愛しみ、大切に、その一生を使う。このような言葉はない」との話でした。

今でもこれは工芸の根本なのではないかと思っています。

おめでとうございます。期待しています。

◇旧三研究会 概要

京都工芸研究会

【目的】京都における工芸の進歩発達、科学知識の普及を図り、併せて会員相互の連絡と親睦を図る
【設立】昭和三年十月二日
【初代委員長】坂田房治郎
【主な事業】

- (1) 研究の発表と技術の交流
- (2) 一般素材に関する研究
- (3) 学会並びに研究機関との連絡
- (4) 調査研究並びに発明考案の助長奨励
- (5) 研究所の業務賛助
- (6) その他工芸の進歩発達に必要なと認める事業

【展覧会】

- 「京の工芸展」「京の伝統工芸展」等
- 第一回 京都工芸展覧会／京都工芸展（福岡市）一九四九（昭和二四）年
- 第二～三回 京都工芸展（京都美術館、広島・福屋、岡山・天満屋）一九五七～五八（昭和三七）年
- 京都伝統工芸展（東京・白木屋 京都市と共催）一九六二（昭和三七）年
- 京都工芸展（京都市工業試験場新築記念）一九六六（昭和四一）年
- 第一～二五回 京の工芸展 一九六七～九二（昭和四二～平成四）年
- 第二六回 京の伝統工芸展／「建都二二〇年」京都からの発信工芸と国際交流 一九九四（平成六）年
- 京都工芸研究会展「遊びどころのものづくり」
- （東京・リビングデザインセンターOZONE）一九九五（平成七）年

○「総合テーマ「遊」による三事業」一九九六～二〇〇三（平成八～一五年）

○製品開発研究・「ザ・シングルウーマン」「はこもの」「茶You遊」

○会報発行・会報「こうげい」一九九七～二〇一五（平成九～二七年）六五号まで発行

○インターネット・

ホームページ「京都工芸研究会（後の「京都の工芸」）開設一九九七～二〇一五（平成九～二七年）

メールマガジン「京都の工芸」発行 二〇〇二～一〇（平成十四～二二年）一〇八号まで発行

○「いっぴん」おとなの酒と器としつらえ」二〇〇六～〇八（平成一八～二〇）年度

○「季節を愛でる京の飾り」（設立六五周年記念事業）二〇二一～二四（平成二四～二七）年度

【経常事業】

伝統産業技術後継者育成研修協力 諸工芸 一九七〇～一九七九（昭和四五～五四）年

漆工（京漆器）一九七五（昭和五〇）年以降、現在まで

研修見学会 年間一～二回

講演講習会 年間一～二回

京都金属工芸研究会

【目的】金属工芸の振興を図り、あわせて会員相互の技術の交流連絡を図る。

【設立】昭和三四年九月十日

【初代委員長】初代委員長 浅利隆 副委員長 田辺卯三郎 加藤宗厳

【主な事業】

- (1) 研究と技術の交流
- (2) 意匠の改善と保護
- (3) 後継者の補導育成
- (4) 学会、研究機関との連絡
- (5) 講習会、講演会、展示会、見学会等の開催
- (6) その他必要な事業

【展覧会】

- 「京都金工展」
- 第一回 一九六〇（昭和三五）年
- 第二～四回 丸物画廊 一九七〇（昭和四五）年度
- 第五～七回 丸物画廊 一九七二～七四（昭和四七～四九）年度
- 第八～十回 丸物画廊 一九七五～七七（昭和五〇～五二）年度
- 第十一回 丸物画廊 一九七九（昭和五四）年度
- 第十二～十四回 京都市勸業館 一九七二～七四（昭和四七～四九）年度
- 第十五回～十六回 丸物画廊 一九七五（昭和五〇）年度
- 第十七回～三〇回 京都市伝統産業会館 一九七六～八八（昭和五一～六三）年度
- 第三一回～三九回 京都市伝統産業会館・京都市勸業館「みやこめっせ」等 一九九〇～九八（平成二一～二九）年度
- 第四〇回
- ～四八回「京都金工・竹工展」（京都竹工芸研究会と協同開催）京都市勸業館「みやこめっせ」 一九九二～二〇〇七（平成一三～一九）年度
- 第四九回「京都金工展」京都伝統産業ふれあい館 二〇〇八（平成二〇）年度
- 第五〇回「金工展」大本山麻山寺 二〇一〇（平成二二）年度
- 「金属と竹デザインコンペ」（京都竹工芸研究会と協同開催）京都市勸業館「みやこめっせ」等 一九九七～二〇〇八（平成九～二〇）年
- 「京の金工展」一九七〇（昭和四五）年度 名古屋栄
- 一九八四（昭和五九）年度 東京大丸
- 一九八六（昭和六一）～一九八八（昭和六三）年度 広島せこう各画廊

【記念誌発行】

第三〇回京都金工展記念誌『金属工芸』発行 一九九〇（平成二）年三月

【経常事業】

研修見学会 年間一～二回

講演講習会 年間一～二回

京都竹工芸研究会

【目的】京都市における竹工芸の振興を期し、会員相互の協力により技術上の研究を行い、もって

会員の事業の発展を図る。

【設立】昭和三四年十二月四日

【初代委員長】初代委員長 浅利隆 副委員長 森田万次郎

【主な事業】

- (1) 技術の向上改善を図る研究と技術の交流
- (2) 後継者の補導育成
- (3) 学会、研究機関などの連絡
- (4) 講習会、講演会、展示会の開催と見学
- (5) その他、会の目的達成に必要な事業

【展覧会】

- 「京都竹工芸展」
- 第一回 一九六〇（昭和三五）年
- 第二～四回 丸物画廊 一九七〇（昭和四五）年度
- 第五～七回 丸物画廊 一九七二～七四（昭和四七～四九）年度
- 第八～十回 丸物画廊 一九七五（昭和五〇）年度
- 第十一回 丸物画廊 一九七九（昭和五四）年度
- 第十二～十四回 京都市勸業館 一九七二～七四（昭和四七～四九）年度
- 第十五回～十七回 丸物画廊 一九七五（昭和五〇）年度
- 第十八回～三〇回 京都市伝統産業会館 一九七六～八八（昭和五一～六三）年度
- 第三一回～四〇回 京都市伝統産業会館・京都市勸業館「みやこめっせ」等 一九八九～九八（平成元～一〇）年度
- 第四一回
- ～四九回「京都竹工・金工展」（京都金属工芸研究会と協同開催）京都市勸業館「みやこめっせ」 一九九二～二〇〇七（平成一三～一九）年度
- 第五〇回「二〇一〇京都竹工展」京都伝統産業ふれあい館 二〇一〇（平成二二）年
- 第五一回「京都竹工展」京都伝統産業ふれあい館 二〇一〇（平成二二）年
- 「竹と金属デザインコンペ」（京都金属工芸研究会と協同開催）京都市勸業館「みやこめっせ」等 一九九七～二〇〇八（平成九～二〇）年
- 「竹工芸公募展 in 京都」京都伝統産業ふれあい館 二〇一二～一五（平成二四～二七）年

【記念誌発行】

第三〇回竹工芸展記念誌『竹工芸』（発行 一九八九（平成元）年三月

設立四〇周年記念誌『竹編組模式図集・六つ目編』二〇〇〇（平成一〇）年三月

【経常事業】

竹編組勉強会 年間 十二回

見学研修会 年間一～二回

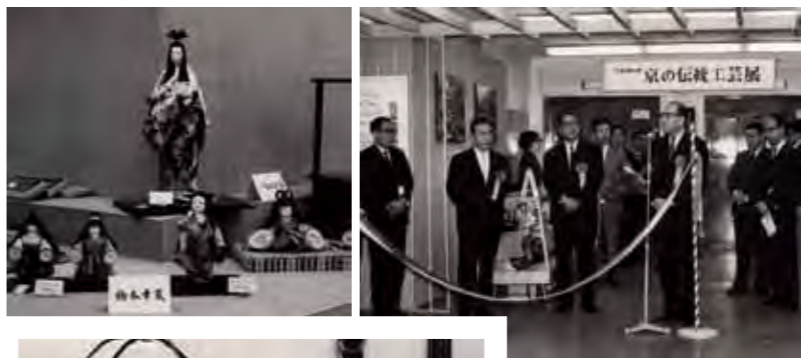
研究例会 年間一～二回

講演講習会 年間一～二回

◇写真で見えるこれまでの研究会活動

京の工芸展・京の伝統工芸展

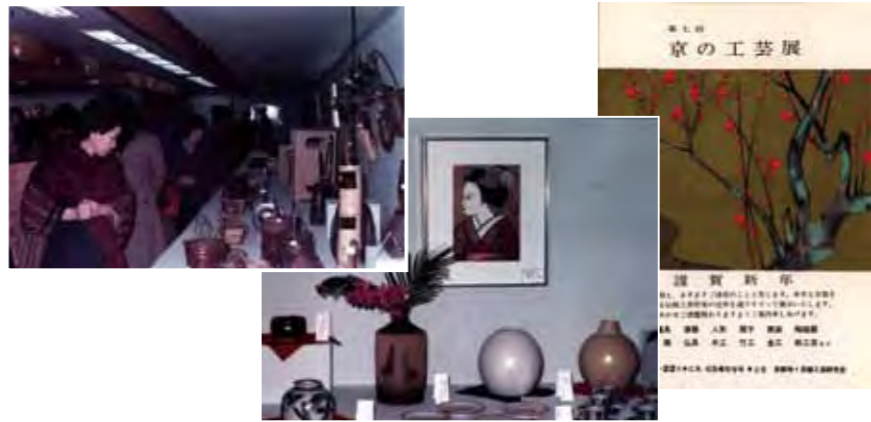
一九六七（昭和四二）年から開催され、一九九四（平成六）年までの三十七年間で、二六回開催されました。京都市の宣伝と販売促進のため、ほぼ毎年のように、岡山などの都市で、展示会を実施しました。出品された展示品は、京都の工芸の粋を一堂に集めたものとなりました。一九七五（昭和五〇）年からは主に京都市内で開催し、一般や業界に向けたアピールするともに、商品開発の取組も紹介しました。



●京の伝統工芸展
（万博協賛 京都大丸）
一九七〇（昭和四五）年



●第七回京の工芸展
（広島・福屋）
一九七三（昭和四八）年



「京都市伝統産業会館」一九七六（昭和五二）年に左京区岡崎に設置。京都市と伝統産業界の共同運営で伝統産業振興の拠点となり、展示会会場として長く親しまれ利用されました。現在は一九九六（平成八）年に開設された京都市勤業館「みやこめっせ」内に「京都伝統産業ふれあい館」として併設されています。

第13回案内葉書より

●第八回京の伝統工芸展
（「京の工芸展」改称 建仁寺）
一九七五（昭和五〇）年

オイルショックによる不況のため他都市での開催を中止した後初めての展覧会は京都・建仁寺で実施しました。伝統的産業振興法施行を受け、関係官庁や業界、一般市民へのPRに重点を置いた展覧会活動でした。お寺での工芸品の展示は歴史都の文化と歴史にあつたレイアウトとなりました。

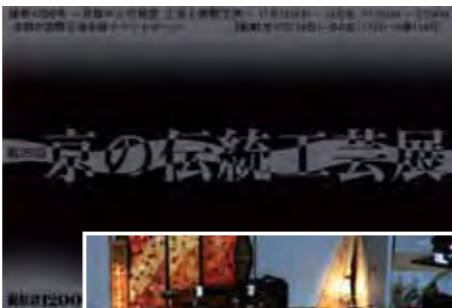


●第十八回京の伝統工芸展
「現代に生きる伝統の技」
（京都市伝統産業会館）
一九八五（昭和六〇）年



「五八企業から約五八〇点の出品。研究会会員と試験場の共同企画・製作による工試コーナーが設置される。伝統文様へのCC活用や色漆など、試験場開発の新技术を応用したデザインを展示。四業種一〇企業が四二点を出品した。「plate」「Tava」のほか、ペンスタンド、座卓、サイドボード、スタンドランプなど。「昔ながらの「漆」のイメージを払拭するモダンなものばかり」（室内誌）

●第二六回京の伝統工芸展
「建都二二〇〇年」京都市からの発信 工芸と国際交流
（京都市国際交流会館）一九九四（平成六〇）年



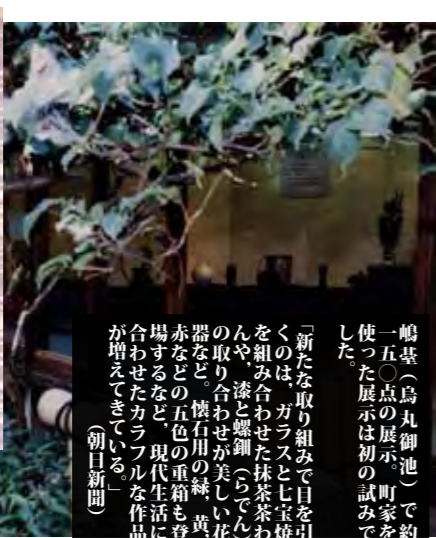
外国人作家の作品参加と点前や生け花の実演によって国際交流を行いました。製品開発事業「遊びこころのものづくり」の成果発表では、テーマを「遊」とし、食・住を中心にデザインした製品を展示しました。生活シーンを想定したディスプレイにより、これまでになく展示会となりました。



●京都工芸研究会展
「遊びこころのものづくり」
食・住・遊の生活デザイン
（東京・リビングデザインセンター OZONE）
一九九五（平成七）年



●京都工芸研究会設立六五周年記念会員逸品展
（京都伝統産業ふれあい館 イベントルーム）
二〇一三（平成二五）年



「新たな取り組みで目を引くのは、ガラスと七宝焼を組み合わせた抹茶茶わんや、漆と螺鈿（らでん）の取り合わせが美しい花器など、懐石用の鉢・黄赤などの五色の重箱も登場するなど、現代生活に合わせたカラフルな作品が増えてきている。（朝日新聞）」

●第二五回京の伝統工芸展
「京の町文化を演出する工芸 茶・華・舞・遊」
（嶋基 烏丸御池）一九九二（平成四）年



東京で展示し京都の工芸を相対化することで今後がかりとなりました。

京都金工展 京都竹工芸展

一九六〇（昭和三五）年から作品展「示会」として、毎年盛大に開催されました。会員の技術交流と新商品提案の場となりました。

●京の金工展

東京大丸・広島そごう美術画廊。
一九八四～八八（昭和五九～六三）年頃

●京都金工・竹工芸展

（京都市伝統産業会館）



一九七〇（昭和四五）年頃から、共同での開催となる。



2008 京都金工・竹工展



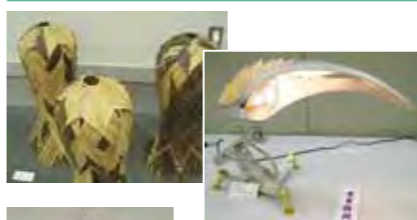
●京都竹工展

▲第二回展 一九六一（昭和三五）年 ▲第二七回展 一九八六（昭和六一）年

●竹と金属デザインコンペ

'97 ~ 2008

一九九七（平成九）年からは、学生からデザインを公募する「竹と金属デザインコンペ」を開催しました。学生ならではの自由な発想の作品が集まりました。



●第五〇回記念京都金工展（大本山廬山寺）



第五〇回記念京都金工展は、大本山廬山寺（共催）にて開催しました。京都金属工芸研究会会員の作品の他、歴史待作家による作品を展示しました。

記念講演会は、大西清右衛門氏（千家十職・京都金属工芸研究会会員）を講師に「茶ノ湯釜の美と歴史」の演題で一般の方の参加もしていただきました。

金属工芸の逸品と桔梗の花が美しい庭園とを楽しめる展覧会となりました。



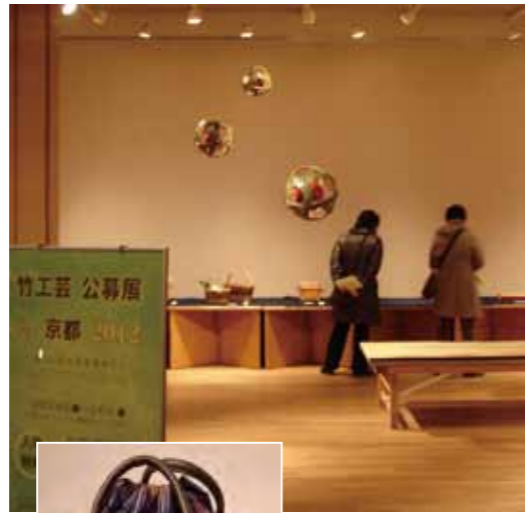
●竹工芸公募展 in 京都 「新しい竹工芸を求めて」

2012 ~ 2015

「昔の人の言葉に「守・破・離」というのがあります。「破」とは、まさしく自分の殻を破って創造することでしょう。人は知らず知らずのうちに日常に流されて「破」を忘れてしまいがちなものです。一念発起、殻を破った貴方の作品を見せてください。」（第一回応募要項より）



二〇一五（平成二七）年 展覧会風景



二〇一五（平成二七）年 作品審査



こんちく衆

一九九九(平成十一)年五月、京都金属工芸研究会と京都竹工芸研究会の有志で発足、六月には第一回会合が開かれました。活動内容は「売れるものづくり」「異素材を取り入れた商品づくり」「コンピュータなどの最新の技術を積極的に取り入れた商品開発」「異分野・異業種の工房を互いに訪問し情報交換する」などでした。

二一世紀の到来を前に発足したこんちく衆の目的は「この活動を通して豊かな人間性の追求を試み、参加者が楽しく仕事に打ち込み、高い専門性に磨きをかけ、こんちく衆が、新しい京都文化創造に役立てたらと願うものであります」(企画書より)でした。現代に通じる問題意識を持った活動でした。

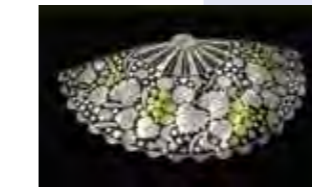
◎金工・竹工展での展示(みやこめっせ) 二〇〇三(平成一五)年



「こんちく衆」を振り返って (株) 中嶋象嵌 中嶋優子

京都工芸研究会創立おめでとうございます。数多い工芸が京都の中で新しい知恵を働かせ次の世代へ継ぐ大切さは、京都にすむ人々の願いでも有ると存じます。私が十数年前に竹と金属との「こんちく衆」に入会し、しなやかで暖か味を感じる竹素材に触れ、自由で斬新な発想を皆で語った事はとても楽しい時間でした。もの作りをしなくてもその暖かい世界を持ち帰り職人の仲間へ伝える喜びも頂きました。今回、再びこの会で新しい出会いと未知の世界での創造に今からドキドキしています。京都工芸研究会の皆様におかれましては、未永くご活躍される会でありませう。お祈り申し上げます。

◎二〇〇五(平成十七)年 展示作品



◎こんちく衆展「モダンや和」(京都クラフトセンター) 二〇〇七(平成一九)年



「金竹衆」 小川進
金工研の小泉さんの呼びかけに、「竹の方から誰も参加しなければ体裁が悪いから」と竹工の副委員長の中川さんに云った「自分もそうや」との返事。始まりはそうだったけど、皆によくしてもらって楽しい会でした。

◎二〇〇七(平成十九)年 展示作品

◎こんちく衆展「京のおめでとうさん」(京都館(東京・赤坂)) 二〇〇六(平成十八)年



1999 (H11) 年	1959 (昭和 34) 年の竹工芸・金属工芸研究会創立の40周年記念して発足。1年間で商品カタログを作成するのを目指し、商品提案・試作・テスト販売などを計画し活動。
2000 (H12) 年	金工・竹工芸展 こんちく衆グループ参加 テーマ「境界・しきり」 精華大学と協同 学生コンペ
2001 (H13) 年	金工・竹工芸展 こんちく衆グループ参加 テーマ「もてなし 和と洋」
2002 (H14) 年	金工・竹工芸展 こんちく衆グループ参加 テーマ「あかり」 京町屋こんちく衆展
2003 (H15) 年	金工・竹工芸展 こんちく衆グループ参加 テーマ「サイコロ」 モダンや和 於：クラフトセンター
2004 (H16) 年	金属と竹によるあなたへの逸品 於：クラフトセンター
2005 (H17) 年	こんちく衆展 於：ギャラリー圓夢 こんちく衆展 於：クラフトセンター
2006 (H18) 年	「金属と竹によるあなたへの逸品」(メモリアルグッズ 小家具 アクセサリー インテリアオブジェ) *ブランド化を目指してパッケージやロゴマークのデザインを行う。ゴム印を作成。 金工・竹工芸展 こんちく衆グループ参加 テーマ「メモリー」 第2回こんちく衆小品展 於：ギャラリー圓夢
2007 (H19) 年	「京のおめでとうさん」 於：京都 京都館*以降、「京の本物(ほんまもん)」をメインテーマにする 京都の鴨川で水あそび 於：京都 京都館 こんちく衆展 於：クラフトセンター こんちく衆展 於：ギャラリー圓夢
2008 (H20) 年	金工・竹工芸展 こんちく衆グループ参加「雅」初夏の装いともてなし こんちく衆展 於：遊覧頻展 「初夏の装いともてなし」 於：ギャラリー圓夢 「クラフト京あそび」 於：ゼスト御池
2009 (H21) 年	こんちく衆展 於：遊覧頻展 「京の四季 初夏を愉しむ」 於：ギャラリー圓夢 10周年記念講演会・展示会 ～人・町・時代を結びあう～金属と竹の工芸家集団 こんちく衆
(この間活動停止)	
2013 (H25) 年	解散会 会員 (20名)

こんちく衆 企画書 一九九九(平成十二)年



こんちく衆マーク 2006(平成19)年

総合テーマは「遊」〜三事業 製品開発研究・会報発行・インターネット

製品開発研究

現代生活にフィットした工芸品を参加員と事務局が協力してデザインし、商品化を試みる事業で二〜三年のサイクルで実施しました。デザインのコンセプトは「遊」。これは、工芸研究会が追求するテーマでもありました。遊びごころを大切にしながら、生活に潤いを与える工芸品づくりを目指しました。

一九九六(平成八)年から、京都工芸研究会は「遊」を総合テーマに「製品開発研究」「会報発行」「インターネット」の三事業を開始しました。いずれの事業も会員が協力し合い知恵を出しながら取り組みました。

● 1996-1998 年度

ザ・シングルウーマン - 30 ~ 40 代の女性を対象にした製品開発 -

ターゲットニーズを把握するためにアンケートを実施し、結果から導き出した「自由」「シンプル」「ナチュラル」をキーワードに「上質で心地良い日常」を演出するアイテム開発を目指しました。



● 1999-2001 年度

はこもの 箱・函・筐・筐・匣…。

「はこもの」イメージマップ



それぞれの想いを包みこむ「はこもの」いろいろ。さまざまな素材、色かたちの「はこ」をデザインしました。

● 2001-2003 年度

茶 you 遊 ~ Cassic & Casual

「茶 you 遊」事業の思い出 陶泉窯 谷口哲也
「工芸研究会のいいところ」はやはり京都で伝統的な技術、知恵を継承している物作りの人達に、気楽に交流を深め、自身の制作に力を持ち、これからはなにかと思えます。二〇〇一〜二〇〇三年に行われました「茶 you 遊」。このタイトルから議論が膨らみ、この英語を取り混ぜたテーマに決定いたしました。清水焼の窯元として、当時から美味しいお茶を気楽に楽しむ空間を作りたいと思っていました。それを実践に結びつけられた事業としてテーマと共に非常に印象に残っている事業でした。当時の工業試験場工芸研究室のメンバーと東京まで行き展示会を開催できたことも思い出となっています。



お茶を愉しむ道具を「クラシック」「カジュアル」の二つのテーマでデザインしました。作り手と使い手との交流の中から生まれたお茶の道具のデザイン提案です。▶京都展・四條京町家、▲東京展・京都館(赤坂)



■会報発行
「こうげい」創刊(年4回)

一九九七(二〇一五(平成九(二七)年)の間に六五号まで発行

会報発行事業では、会報「こうげい」を年四回を基本に発行し、会員他、関係機関や一般にも配布しました。
企画・取材・編集・デザインなど担当委員と事務局との手作り。当初はモノクロでしたが、一六号からカラーになり、研究活動の情報提供の他、会員の工房訪問記、活動紹介、工芸デザインに関する最新情報など多彩な記事を掲載しました。



▲「こうげい」創刊号

■インターネット
「京都工芸研究会ウェブサイト」開設

一九九七(二〇一五(平成九(二七)年)まで

インターネット事業では、当時まだ身近でなかったウェブサイトを構築を目標にネット関係の技術を勉強しながらの事業でした。研究会マルマガも発信しました。研究会の製品開発研究事業のPRや会報「こうげい」のPDF配信など、ネットを通じた研究会活動のアピールを積極的に行いました。



製品開発研究事業

「遊」三事業で培った会員間の異業種交流のノウハウを発展させるため、テーマ設定による製品開発に取り組みました。

団塊世代をターゲットにしたお酒を楽しむ器・小物・インテリアの商品開発に取り組みました。
酒造メーカー、風呂敷メーカー、料亭、インテリアコーディネーター、セレクトショップ等の協力のもと、テーマに沿った約四〇アイテムをデザインし試作展と本作展を京都で開催、東京での展示も行いました。
この事業でデザイン開発された「おそろい酒器」など一部のアイテムは、現在でも会員さんのショップで入手可能です。

●2006-2008 年度

いっぴん ippin おとなの酒と器としつらえ *京都工芸研究会設立六〇周年記念



【パーティ】

【親子で一献】

おそろい酒器
同じ形のカット
ブを、異なる
技術と素材で
製作するデザ
イン。

【夫婦で乾杯】

【少年時代のように、友と】

●2013-2014 年度

季節を愛でる京の飾り *京都工芸研究会設立六五周年記念



家庭の玄関先や応接間などの棚の上に季節を感じられる京都の工芸品を飾り、現代の家庭で気軽に季節を愛でる演出を企画・制作しました。「畳や床の間も無くなった現代住宅の中に日本文化をどう取り入れるか」を課題に取り組みました。
コーディネートとして、池坊由紀次期家元、建築家の岸和郎氏をお迎えし日本の飾りを美しく演出する各季節の場面を提案したものです。

京都洛風は、唐木家具を製作しています。二〇一三年京都工芸研究会の勉強会に参加しました。「四季を愛でる京のしつらえ」の切り口で、池坊由紀さん、岸和郎先生から、それぞれ一二月、月々のテーマを頂戴し、参加者がそれぞれの解釈を制作する企画です。
この勉強会により、物作りの手法としてテーマに基づく事、又テーマを掘り下げると色々な事が吸収できる事も教えて頂き、プロデュースの方向性や、製作技術が広がる現在の原動力になっております。今年度の勉強会でも、いろいろなる事を吸収したいと思えます。
京都洛風 プレーベル馬場伸朗

東京展(象彦日本橋東京店)

刊行物など

- 第三〇回京都金工展記念誌「金属工芸」
- 第三〇回竹工芸展記念誌「竹工芸」



一九八九(平成元)年に「京都竹工芸」が一九九〇(平成二)年に「京都金工展」が、それぞれ第三〇回を迎え、記念誌を発行しました。

●『竹編組模式図集・六つ目編』

京都竹工芸研究会四〇周年記念誌として企画され、京都精華大学の協力を得て、工業試験場(当時)と京都精華大学、京都竹工芸研究会の連携により二〇〇〇(平成一八)年に出版されました。
基本的な編組(第一段階)三〇〇枚、基本的な編組の変化・拡張・発展したもの(第二段階)二〇〇枚、編組の配色パターン(第三段階)五〇〇枚、竹工芸以外の編組、その他の基本的なもの(第四段階)三〇〇枚で構成されています。

講習会・勉強会・見学会など

一九八四（昭和四九）年から、デザインに関連するテーマの講演会・研修会・セミナー（工業試験場、工業技術センター、産業技術研究所主催）を、工芸・金属工芸・竹工芸のそれぞれの研究会事業として共催しました。近年の活動を紹介します。

●漆工技術講習会
漆を科学する会（賛助会員）と京都工芸研究会の主催で講演会・講習会を一九九五（平成七）年より開催しています。漆工技術について科学的、歴史的視点からの最新の研究成果を提供しています。



下：二〇一五（平成二七）年三月開催「宋元時代の唐物漆器」魅惑する大陸からの贈り物」

台湾研修旅行 二〇一四（平成二六年）



海外研修（台湾）
（株）アトリエYOU 加藤良紀
金属工芸研究会時代に台湾台北研究旅行を担当させていただきました。二〇一四年七月四日～七日に総勢十三名での研修となりました。研究員の内田純子様にご案内頂きながら中央研究院歴史語言研究所歴史文物陳列館にて殷墟（いんきょ）などの時代時代による出土品や居延漢簡（きよえんかんかん）等貴重な歴史文物を見ることが出来ました。
故宮博物院では「青銅器工芸の謎、古代青銅器の輝き―中国歴史博物館展―（ロウシンシー）」等を見学したのですが、内田様のご説明により歴史が移り変わるにつれて作られていく青銅器も変わっていく事が解り、また違った見方になりました。

伝統産業技術後継者育成研修の後援

一九六七（昭和四二）年に開講した京都市伝統産業技術者研修（諸工芸コース）の補助・後援を継続して行っています。
現在は、「伝統産業技術後継者育成研修」と名称変更し、漆工コースが開講されています。漆工の基本技術の習得から伝統手法を守った京時絵の技術講習を実施しています。
修了者の多くは業界に定着して活動しており、人材育成制度として高い評価を受けています。



右：平成二六年度漆工応用コース講義風景
下：同修了作品展

●3Dプリンタ勉強会 二〇一四～一五（平成二六～二七）年
ものづくりの現場で急速に普及した3Dプリンタについて、京都金属工芸研究会の主催で勉強会を行いました。産業技術研究所には熱溶解積層方式が、京都府中小企業技術センターには粉末焼結方式の3Dプリンタが設置されており、担当の研究員にそれぞれの特性について学びました。また福井県工業技術センターでも実地研修を行いました。



京都府中小企業技術センター

福井県工業技術センター

◇新生・京都工芸研究会 これからの活動

京都工芸研究会 設立総会・祝賀会

日時：平成二七年三月二三日（月）
場所：ハイアットリージェンシー 京都



委員紹介



京都が中心となり、伝統的な文化や工芸を世界に発信していく。このことが、今後日本をリードする柱の一つになると思っています。一つに統合されたこの研究会の果たすべき役割はどういったことなのか、会員皆で知恵を絞り、様々な事業を提案・実行することからのスタートです。
他の研究会や団体とも交じりありながら構築できればと考えております。今後益々皆様のご協力をお願い申し上げます。

藤岡光影堂 藤岡春樹

私の人形人生
京都工芸研究会の創立を祝い、益々の発展を願ってやみません。さて恐縮ですが、人形人生の体験から想いを一言。工芸は常に人々の心をいやしたりを、和ませるにとどまらず、諸文化の礎を耕作し、よりよい社会環境をクリエイトする一端を担い、人々の幸福の為に存在していると思っております。この理念は今も変わらず生きています。
本年は戦後七〇年。戦時中のあの自由を奪われた総動員法等の反省の中から「歴史は繰り返す」ということわざのようにならないように、願っております。小生は人形作品を通じて、一歩前へ平和な社会のために進みたいと思っております。旧工芸研究会の展覧会や会報等、なつかしい思い出一杯で感謝しております。ありがとうございました。

片岡光春人形司 片岡行雄

「京都工芸研究会便り」

研究会活動を会員の皆様にお伝えするニュースレターです。一般の方にも適宜配付しております。刊行は不定期ですが、時宜にあった内容で構成していきます。会員間で共有したい、内外にアピールしたい情報等、ありましたら、事務局までお知らせください。



設立記念 「京都の工芸・逸品」展

京都工芸研究会設立記念「京都の工芸・逸品」展を、アーツスペース余花庵（京都市役所西側）にて開催しました。

各会員の高い技術を示す、京都の工芸の逸品の展示となりました。金工、竹工、漆工、陶磁器、七宝、木版画、ガラス、人形その他、漆採取道具や竹細工道具等の展示も行い、異業種交流という会の特色もアピールしました。寺町通りを散策する観光客が通りがかりに来場され、展示作品を熱心に見ておられました。会場では会員間の交流、情報交換の場となるとともに、会員ご自身が展示品の説明等を行い、来場者に作品への理解を深めていただく場も生まれました。会場ギャラリーの顧客が来場され、美術コレクターの視点のご意見をいただきました。研究会活動のスタートとして意義ある展覧会となりました。

【参加会員】 四五会員
【展示作品】 五六点
【来場者】 七七三名



京都工芸研究会設立記念
京都の工芸・逸品展
Commemorative Exhibition for the Establishment of the Society of arts and crafts of Kyoto
平成27年11月10日(火)～15日(日)
10:30～20:30 (最終日18:00まで)
主催 京都工芸研究会
共催 地方独立行政法人京都市産業技術研究所
京都ものづくり協会のつくり場
会場 京都市（北区）南禅寺21 余花庵
余花庵
京都市役所
電話 075-213-4911
FAX 075-213-4911



京都新聞「京日記」
二〇一五(平成二七)年
十一月一日(日) 朝刊

新商品開発事業「オトナの京もの」

研究会の設立と同時に開始した商品開発事業。テーマは「オトナの京もの」です。「京もの」の価値である素材・技・意匠の良さを大切にしつつ、現代の「オトナ」を生きる高感度なユーザーに向けた異業種コラボレーションによる新しい「京もの」の商品開発と販路開拓に取り組みます。



▶試作品「竹切りチヤンゲル」
(中川竹材店×大家漆工房)
「京都の工芸・逸品」展にて展示。

《事業について》
会員間でお互いが扱う素材と技術を学ぶ会員間交流から開始し、企画、素材、スタイリング、制作技術などデザイン全般について、研究所職員と協力して進めます。
また異業種間での商品開発の課題克服と販売ルート研究など、商品開発にかかわる課題のひとつひとつについて検討していきます。詳細については事務局へお問い合わせください。



京都工芸研究会
記念誌に寄せて
(株) 松栄堂制作室 吉原有希子
京都工芸研究会の長い歴史に於いて、弊社の関わりはほんの小さな一部分ですが、「工芸」という広い枠組みの中で、様々な分野の諸先輩方と、忌憚なくお話しをさせていただけただけの大変貴重な時間を過ごさせていただき、深く感謝申し上げます。
これからも、「工芸」が人々の暮らしを豊かにする存在であり続けるために、異業種が混じり合い刺激しあい、京都らしいものづくり、提案を行うための「場」を提供していただき、ともに励ませていただきましたこと存じます。よろしくお申し込み申し上げます。

竹編組勉強会

月一回程度、研究所にて竹編組の技術勉強会を行っています。作品は二月の展示会で披露する予定です。



(参加者を随時募集しております。お気軽にお問い合わせください。)

京都工芸研究会 新商品開発事業
オトナの京もの
試作展示
京都工芸研究会では、平成27年3月の三研究会統合（工芸・金工・竹工）をきっかけに新たな会員間の技術と素材を通じた交流として、魅力ある新しい「京もの」の新商品開発に取り組みしています。今回は「オトナの京もの」をテーマに表現を広く、まわりつながら、かみ・めぐる、伝統工芸に製がキーワードとして「環」を取り上げ、三つの視点から様々な商品を発表していきます。ご期待ください。

変化
使い手とともに変わってゆくことを受け入れる

【環】

技術
磨き続けた技巧を惜しみなく注ぐ

伝統
古典の意匠を受け継いで発展させる

物が溢れ知識までが氾濫する時代、断捨離という流行、生活を出るだけ単純化しようとする心構えの過剰な反応で大切なものが捨て去られたようです。
その結果貧しさと悲しさを兼ね備えた同時不幸の多くの人が出現。人類が誕生した頃人々が強く求めたのは命であり生きたいという願いだった。今、余生という言葉がある。命まで余ってしまったらいい。せめて魂は確保しておきたいものである。
工芸品の役目として人の心を和ませ人として豊かな人間関係構築の必需品として求められるものを目指したい。京都工芸研究会をその羅針盤として自分の進むべき方向を見つけたいと願っています。

和銅寛 小泉武寛

竹編組勉強会への参加者を中心に研究所市民向けイベント（京都ラフォーレ@産技研など）で竹編み体験を実施しています。子供達にも毎年大人気です。

◆ 京都工芸研究会 略年表

- 一九四八(昭和二三)年 京都工芸研究会設立
- 一九四九(昭和二四)年 第一回京都工芸展覧会・京都工芸展(福岡市)
- 一九五六(昭和三一)年 京都漆技研究会(昭和二七年設立)と合併
- 一九五九(昭和三四)年 京都金属工芸研究会設立
- 一九六〇(昭和三五)年 京都竹工芸研究会設立
- 一九六二(昭和三七)年 第一回京都金工展第一回京都竹工芸展 以降、二〇〇八(平成二〇)年まで、年一回の展覧会を開催
- 一九六六(昭和四一)年 京都伝統工芸展(東京・白木屋) 京都市と共催 広島・岡山・札幌でも「京都展」を一九六五(昭和四〇)年まで開催
- 一九六七(昭和四二)年 京都工芸展(京都市工業試験場(現・京都市産業技術研究所) 新築記念)
- 一九七四(昭和四九)年 第一回京の工芸展(一九九二(平成四)年第二五回展まで開催)
- 一九八二(昭和五七)年 京都市伝統産業技術者研修(諸工芸コース)の開催に際し、補助・後援の開始(現在は伝統産業技術後継者育成研修「漆工コース」)
- 一九八九(平成元)年 京都市工業試験場主催の講演会・研修会・セミナー「工芸デザイン研修会」「産業デザイン講習会」「漆工技術講習会」等を後援
- 一九九〇(平成二)年 第三〇回竹工芸展(京都市伝統産業会館) 第三〇回竹工芸展記念誌『竹工芸』発行
- 一九九四(平成六)年 第二六回京の伝統工芸展「建都一二〇〇年」京都市からの発信工芸と国際交流
- 一九九五(平成七)年 京都工芸研究会展(東京・リビンデザインセンターOZONE)
- 一九九六(平成八)年 「遊」を総テーマに三事業「製品開発研究」「会報発行」「インターネット」
- 一九九七(平成九)年 会報「こうげい」創刊 ホームページ「京都工芸研究会」(後の「京都の工芸」)開設
- 一九九九(平成一一)年 京都金工・竹工展に「竹と金属デザインコンペ」を併催(二〇〇八年まで)(京都伝統産業ふれあい館)
- 二〇〇一(平成一三)年 工芸研究会設立五〇周年記念展(京都・みやこめっせ特別展示場 製品開発研究事業展「ザ・シングルウーマン」(京都・みやこめっせ)
- 二〇〇一(平成一三)年 『竹編組模式図集・六つ目編』を京都竹工芸研究会四〇周年記念誌として出版
- 二〇〇二(平成一四)年 製品開発研究事業展「はこもの」(京都伝統産業ふれあい館、東京・京都館)
- 二〇〇三(平成一五)年 メールマガジン「京都の工芸」発行
- 二〇〇八(平成二〇)年 製品開発研究事業「茶You遊」試作展(京都・四条京町家、東京・京都館)
- 二〇一〇(平成二二)年 茶You遊二〇〇三製品開発研究事業展(設立五五周年記念)(京都クラフトセンター)
- 二〇一二(平成二四)年 製品開発研究事業「いつびん」おとなの酒と器としつらえ「試作展」(京都・みやこめっせ)
- 二〇一三(平成二五)年 工芸研究会設立六〇周年記念式典(ウエスティン都ホテル京都)
- 二〇一四(平成二六)年 工芸研究会設立六〇周年記念式典(ウエスティン都ホテル京都)
- 二〇一五(平成二七)年 二〇一〇(京都竹工展(第五〇回)(京都伝統産業ふれあい館)
- 二〇一五(平成二七)年 竹工芸公募展 in 京都二〇一二(二〇一五年まで)(京都伝統産業ふれあい館)
- 二〇一五(平成二七)年 第五〇回記念京都金工展(大本山廬山寺)
- 二〇一五(平成二七)年 工芸研究会設立六五周年記念会員逸品展(京都・みやこめっせ)「季節を愛でる京の飾り」京都展(象彦漆美術館)、東京展(象彦東京店)
- 二〇一五(平成二七)年 京都工芸研究会・京都金属工芸研究会・京都竹工芸研究会 統合検討委員会設置
- 二〇一五(平成二七)年 商品開発事業「オトナの京もの」開始
- 二〇一五(平成二七)年 設立記念展覧会「京都の工芸・逸品」展(十一月一〇～十五日 アートスペース余花庵)

京都市産業技術研究所のこれまで

略年表

- 一九一六(大正五) 西陣織物同業組合から、有姿のまま西陣織物染織試験場施設(上京区烏丸通上立売上ル相国寺門前町)の寄付を受け、京都市染織試験場として発足
- 一九二〇(大正九) 化学工業を振興するため、技術上の諮問指導に当たる研究機関として京都市工業研究所を設立
- 一九二〇(大正九) 京都市立工業学校(上京区烏丸通上立売上ル相国寺門前町)の施設で、工業研究所の業務を開始
- 一九二六(大正一五) 京都市陶磁器講習所(明治二九年八月に業務を開始した京都市陶磁器試験所を、大正八年の国立陶磁器試験所の設置に伴い、大正九年に改称)を工業研究所に移管統合し、同講習所跡地(東山区東大路五条上ル梅林町)に工業研究所窯業部を設置
- 一九四八(昭和二三) (旧)京都工芸研究会設立
- 一九四八(昭和二三) 窯業部が旧国立陶磁器試験所跡(伏見区深草正覚町)に設置された京都市工芸指導所へ移転
- 一九五四(昭和二九) 工業研究所全体を京都市工芸指導所に移管合併し、京都市工芸指導所と改称
- 一九五五(昭和三〇) 伝統産業技術者研修(陶磁器コース)開講
- 一九五九(昭和三四) (旧)京都竹工芸研究会設立
- 一九五九(昭和三四) (旧)京都金属工芸研究会設立
- 一九六三(昭和三八) 京都市染織試験場運営協力会設立
- 一九六六(昭和四一) 工芸指導所を京都市工業試験場に改称、新庁舎(南区西九条南田町)へ移転
- 一九六六(昭和四一) 中小企業染織技術者研修(専攻科)開講
- 一九六七(昭和四二) 伝統産業技術者研修(諸工芸コース)開講
- 一九六八(昭和四三) 京都工芸協会設立
- 一九八九(平成元) 工業試験場が下京区中堂寺南町の「京都リサーチパーク」へ移転
- 二〇〇三(平成一五) 京都市産業技術研究所の設置に伴い、工業試験場と染織試験場を各々同研究所工業技術センターと同研究所繊維技術センターに改称
- 二〇〇六(平成一八) 「京都市産業技術研究所整備基本構想」を策定し、両センターの立地的統合を「京都リサーチパーク」内で進めることとした
- 二〇一〇(平成二二) 新庁舎(下京区中堂寺栗田町)へ移転し、新産業技術研究所を開所
- 二〇一〇(平成二二) 知恵産業融合センターを設置
- 二〇一三(平成二五) 京都工芸協会と京都市染織試験場運営協力会が統合し、京都ものづくり協力会発足
- 二〇一四(平成二六) 産業技術研究所が地方独立行政法人へ移行
- 二〇一五(平成二七) 三研究会を統合し、京都工芸研究会設立
- 二〇一六(平成二八) 産業技術研究所が創立百周年を迎える

歴代主担当職員からのメッセージ

○現場が呼んでいる

昭和五〇年頃は常に生活で使う実用品にこそ愛着と安らぎを感じられるものが特に求められていました。一方業界では技術者の育成とその優れた技術保持者の確保、手工技術を活かした生活工芸品の開発が急がれていました。そこで市伝統産業技術者研修事業に研究会の協力を得て、鍍金・彫金・人形等の後継者研修を行い、展示会では今日の生活工芸品の部門を設け開発を進めていた時代でした。その中で工場に出向き夜遅くまで会員の方と色々と話し込むことが多くあり今も心に残っている言葉に「現場には大事なことが沢山転がっているよ」とその方がポツリと仰ったことです。それは時代が移り状況が変わっても通じるのではないかと信じてつづつ振り返ってみました。会員皆様のご健勝・ご発展を願っていました。

池田泰佑(元京都市産業試験場産業工芸部部長)

○工芸研究会、金属工芸研究会、竹工芸研究会の想い出
 新人の頃、木工芸と竹工芸研究会、金属工芸研究会、陶磁器研究会はそれぞれの研究室で、工芸研究会は歴代の工芸部長のご担当であった話をよく聞きました。デザイン研究室が出来て、金属工芸を池田、竹工芸を佐藤、工芸を岡本が分担しました。見学や総会の企画、展示会の案内状や展示は思い出深いです。工芸は「洛趣会」がお手本で、お寺などで展示をしていましたが、「伝統産業会館」が出来てからは、展示の雰囲気演出に苦労しました。平成二年竹工芸の見学総会では、信楽国際陶芸展に行く途中に列車の正面衝突に遭遇、京都駅で小川進さんが二両目に乗られ、追隨した私たちは辛くも助かりました。金属工芸の小泉武寛さんの音頭で竹工芸研究会との有志で創られた「こんちく衆」は小ぶりですが楽しい活動でした。

佐藤敬二(元京都市産業技術研究所工業技術センター研究部長)

○京都工芸研究会設立おめでとうございます。「おもてなし」という言葉が盛んに使われます。この「日本人のこころ」を表す言葉が似合うのは京都の町でしょう。そこで大きな役割を担ってきたのは工芸です。長い時を経て洗練され、削り上げられてきた工芸、そこに「日本人のこころ」が活かされ、出現しています。多様な工芸が交流、融け合って新たな形を生み出してきました。その形が連綿と受け継がれ、変化しつつ発展して来た歴史があります。広範な工芸分野の方々が集うこの研究会の活動を盛んにして行くことが「日本人のこころ」を引き継ぎ、発展させるべき方向と確信します。その活動に多いに期待しています。

阿佐見徹(元京都市産業技術研究所工業技術センター長)

○ふた昔ほど前にも工芸・金工・竹工の三研究会の統合構想がありました。実現せず、またそれと前後して当時の工芸研究会の解散案もあった。なにか今回、新生「京都工芸研究会」の設立に感懐深いものがあります。その作業に取りかかるうとした時、これらの経緯を思うとかなり難産になることを懸念しましたが、それだけの研究会の委員長さんをはじめ会員さんの柔軟な姿勢と勇氣ある決断によって、一年足らずで新研究会の設立総会が開催されたことに当時の事務局として深く感謝しています。

当然のことながら、統合で終わりでなく始まりです。「京都の工芸・逸品展」をスタートとしてみなさんの力を結集した今後のご活躍を祈念しております。

岡本匡史(元(地歴)京都市産業技術研究所 研究主幹)

事務局一同より

新生・京都工芸研究会の設立を心からお祝い申し上げます。記念誌を作成する過程で三研究会が歩まれた歴史を学び直し事務局としてあらためて気の引き締まる思いです。研究所も2016(平成28)年には創立100周年を迎えます。これからも京都の伝統工芸を担う業界の方々と京都の工芸を盛り上げる活動に取り組んでいきます。今後ともよろしく願い申し上げます。

金工 (鍍金) 11	連絡先	TEL	FAX
大西清右衛門		031-2692	031-2691
奥田茂		033-2691	033-2691
高木治良兵衛	高木 篤史	031-2653	031-2653
長谷川龜右衛門		033-2301	033-2301
市長谷川若色	長谷川 聡	031-4929	072-2749
秦蔵六		031-6541	031-6541
山崎蠟型工芸	山崎 誠一	031-4806	031-4806
清澤堂	山中 源兵衛	031-3661	031-6342
吉羽興兵衛		031-3042	071-5786
市りんよ工房	白井 克明	031-7479	031-7480
市和剛寛	小泉 武寛	036-0789	037-5377
金工 (鍍金) 3		TEL	FAX
浅野美芳	浅野 親夫	031-3208	031-3208
井上銀器	井上 尊之	031-2535	031-2546
藤竹影堂	中村 佳水	031-2636	031-2646
金工 (彫金) 4		TEL	FAX
藤小林彫金工芸	小林 正雄	077-235-1193	077-235-1193
小林百合子		025-289-0623	025-289-0623
彫金工芸 水谷醒洋	水谷 醒洋	031-1380	031-1380
仲川純子		011-1473	011-1473
金工 (象嵌) 3		TEL	FAX
藤川人象嵌	川人 一郎	031-2773	034-6247
象嵌屋 小野	小野 真嗣	032-3948	032-3948
藤中嶋象嵌	中嶋 優子	071-2649	062-0329
金工 (七宝) 3		TEL	FAX
賀茂工房	松本 由紀子	032-0632	032-0632
平田桂子		011-1346	011-1346
市ヒロミ・アート	野村 ひろみ	031-3631	033-2478
金工 (鍍金) 6		TEL	FAX
市合場金属	合場 頼正	013-3253	022-1329
鋳屋 市松田	松田 聖	074-24-0903	074-24-0236
京甲冑 佐治	佐治 完三	022-0139	022-0139
市鈴木金彫堂	鈴木 敏弘	031-3183	
藤仁科銀金具製作所	仁科 雅晴	033-1816	031-4809
吉川実		071-1854	071-7191
金工 (総合) 3		TEL	FAX
藤アトリエYOU	加藤 良紀	013-5238	013-5151
金剛つじ	辻 賢一	031-4603	031-6003
藤作島	作島 寛	031-3241	033-0129
漆器 8		TEL	FAX
藤石川漆工房	石川 一	021-1012	021-2833
大家漆工房	芦田 直子	031-3939	031-3939
藤加藤小兵衛商店	加藤 二郎	031-1932	031-7999
漆器のアソベ	瀬部 尋志	041-5044	051-7536
藤象彦	西村 毅	017-0234	017-0235
中村哲公房	中村 宗哲	011-2619	011-1107
光工芸社	島 博行	034-0808	034-0419
三木 表悦 (表悦工房)		021-0825	021-0825
菓子・团扇 1		TEL	FAX
藤阿以波	巽庭 智之	031-1399	031-1399
竹工 (編組) 10		TEL	FAX
石田正一 (竹美齋)		031-7035	031-7035
小川達 (竿頭齋)		082-8217	082-8217
甲斐勝美		037-0145	037-0145
武工房	武智 寿夫	093-3181-8645	
竹工房とよ	豊立 勲二	0774-33-5261	0774-33-5261
竹工房ひさ	藤岡 水子	083-2801	083-2801

竹工 (編組) 10 (前ページ続き)	連絡先	TEL	FAX
竹工芸 細川礼子	細川 礼子	031-4706	031-4706
竹工房 喜徳	細川 秀章	036-0819	036-0819
藤貴司男		031-5439	031-5439
細川 隆男			
竹工 (丸竹) 3		TEL	FAX
黒田正玄		032-4981	013-2929
菱五 中林竹材店	中林 豊之	033-3389	031-8999
高野竹工脚	濱口 美由紀	037-2808	033-2879
竹工 (総合) 11		TEL	FAX
市石川竹の店	石川 恵介	031-0979	031-5814
藤竹定商店	井上 定信	031-1712	031-0209
植田竹材	植田 章裕	031-2077	033-0390
東洋竹工脚	大塚 正洋	037-2733	034-2234
竹又 中川竹材店	中川 裕章	031-3968	031-3945
西河脚	西河 雄一	031-3624	031-9984
市早川喜三郎商店	早川 嘉一	031-0813	031-8106
三木竹材店	三木 清	031-1324	031-5817
宮下 憲治		071-25-0704	0771-25-0704
藤新	藤新 新太郎	071-0299	071-0299
市横山竹材店	横山 富男	031-3961	032-5879
茶道具 1		TEL	FAX
藤岡本八造商店	岡本 政明	031-6101	031-3999
陶磁器 4		TEL	FAX
海鮮齋	八木 海峰	0771-82-3999	0771-82-3999
(一財) 京都陶磁器会館	富永 博	031-1102	031-1102
藤陶泉堂	谷口 哲也	025-0219	025-0406
市平安陶花園	伊藤 圭一	031-8223	033-0907
内装工芸 1		TEL	FAX
藤長谷川松寿堂	長谷川 忠夫	035-1815	031-1371
版画 1		TEL	FAX
藤芸神堂	山田 博隆	031-3613	022-1395
仏壇・仏具 3		TEL	FAX
キツキ本彫工芸研究所	高橋 慶亮	031-2123	041-2428
藤田平製作所	田平 義昭	031-0329	031-0773
時絵・梅仙	下出 梅仙	031-0902	031-0902
人形 2		TEL	FAX
片岡光存人形司	片岡 行雄	013-5823	031-5823
藤京都島津	本多 清一	031-1181	031-1182
表装 3		TEL	FAX
藤岡黒光堂	岡 岩太郎	031-3437	022-0223
藤存芳堂	伏原 佳道	031-2699	031-2699
藤藤岡光影堂	藤岡 春樹	031-0339	031-0339
木工 1		TEL	FAX
藤プレーベル	馬場 伸朗	037-8911	033-7704
番 1		TEL	FAX
藤松栄堂	(制作室) 古原 有希子	011-0964	011-0399
文化財修復 1		TEL	FAX
小川 正彦		046-2639	046-2639
賛助会員 2		TEL	FAX
漆を科学する会	佐藤 豊	031-9139	032-2173
(公財) 京都伝統産業交流センター	八田 誠治	033-3979	031-7121
特別会員 3		TEL	FAX
柴田 昌三	京都大学大学院 地球環境学堂	075-0884	075-0882
東 清和	日本工芸会	077-579-2911	077-579-2911
渡邊 政俊	竹産業コンサルタント	089-71-06-1739	741-2895

京都工芸研究会規約

第一条 本会は、京都工芸研究会と称し、事務局を地方独立行政法人京都市産業技術研究所（以下「研究所」という）内に置き、本会の事務は必要に応じ研究所の職員が行う。

第二条 本会は、京都における工芸の振興を図り、あわせて会員相互の技術の交流と親睦を図ることを目的とする。

第三条 本会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (一) 研究の発表と技術の交流
- (二) 一般素材に関する研究
- (三) 学会並びに研究機関との連絡
- (四) 調査研究並びに発明考案の助長奨励
- (五) 研究所の業務賛助
- (六) その他工芸の進歩発達に必要と認める事業

第四条 本会は、次の会員を以って組織する。

- (一) 普通会員
- (二) 賛助会員
- (三) 特別会員

第五条 普通会員は、本会の目的に賛同し、規約を承認して会費を納入するものとする。

二 賛助会員は、本会の趣旨に賛同し賛助協力するもので、委員会の承認を必要とする。

三 特別会員は、学識経験者、または本会に功労のあつた者より、委員会において推薦した者とする。

第六条 普通会員は、普通会員の紹介で本会に申込み、委員会の承認を必要とする。

第七条 本会の会計年度は、毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終わる。

第八条 会員は、次の会費を納入するものとする。

- (一) 普通会員 年額 一〇,〇〇〇円
 - (二) 賛助会員 年額 二〇,〇〇〇円
- 既納の会費は返還しない。また臨時会費を徴収することがある。

第九条 本会に次の役員を置く。

- (一) 委員長 … 一名
- (二) 副委員長 … 二名
- (三) 委員 … 若干名
- (四) 会計監事 … 二名

第十条 本会は、顧問を置くことが出来る。顧問は委員長が委嘱する。

第十一条 委員及び会計監事は、会員中から総会で選挙し、委員長及び副委員長は、役員の一選によつて定める。

第十二条 委員は、委員会を組織し、本会の運営に関することを定め、会計監事は、経理を監査する。

二 顧問は、重要な会務について委員長の諮問に応じる。

第十三条 役員任期は、二カ年とする。但し、再任を妨げない。

第十四条 本会は、毎年一回総会を開き、次の事項を決議する。

- (一) 事業報告、事業計画並びに決算、予算に関する事項
- (二) その他本会の目的を達するために必要な事項

第十五条 研究所知恵産業融合センター長は、総会において承認された事業計画等に関する、委員長に代わつて決定する。

第十六条 本会の会計事務は、京都工芸研究会会計準則の定めるところによる。

第十七条 本規約は、総会の決議を経て変更することが出来る。

附則 一 この規約は、平成二七年三月二日から実施する。

- 二 第七条の規定に関わらず、平成二七年度の会計年度は、平成二七年三月二三日から二八年三月三十一日までとする。

京都工芸研究会設立記念誌 京都の工芸

発行日 平成27(2015)年12月18日

編集・発行 京都工芸研究会

【事務局】

地方独立行政法人 京都市産業技術研究所
〒600-8815 京都市下京区中堂寺粟田町91
電話 075-326-6100 (代表)
FAX 075-326-6200 (代表)
<http://tc-kyoto.or.jp/>



1948

1959

2015

the Society of arts and crafts of kyoto

京都工芸研究会